

第5回 第1章 古代国家の形成と貴族文化の誕生

## 平城京と天平文化

執筆・講師  
渡辺晃宏

### 学習のねらい

7世紀後半から進めてきた律令国家の建設は、8世紀に入り再度唐の都長安になった都づくり、平城京への遷都を迎えることになった。平城京とはどのような都だったのか、また平城京の時代に律令国家はどのような変化を遂げたのだろうか。また、この時代に栄えた天平文化の特質を、奈良の寺院や正倉院に伝わった資料などから考えてみよう。

### 平城京と地方の支配

藤原京の造営と大宝律令の完成を受けて、約30年ぶりに粟田真人らの遣唐使が派遣された。このとき初めて「日本」という国号が対外的に用いられ、唐との外交関係の復活が図られたが、この遣唐使がもたらした唐の都長安の新しい情報は、再度平城京への遷都を生むことになった。都のつくり直しの財源に充てるためもあって、それまでの富本銭に代わり、唐の開元通宝になった新しい銭貨、和同開珎が発行された。銭貨1枚(=1文)は造営にあたった人々の1人1日分の賃金に相当する。

平城京と並んで、九州には西海道を統括し外交の窓口となる大宰府を、東北地方には蝦夷と呼んで区別した東北地方の人々を支配する軍事・行政の拠点として多賀城を置いた。また、諸国は駅路と呼ぶ幹線道路で結ばれ、使者の乗る馬を管理し、宿泊施設でもあった駅家が設けられた。

平城京に都が置かれた8世紀は、律令国家の地方支配が強化されていった時代でもある。そのために重要な役割を果たしたのが土地政策の転換である。723年の三世一身の法、743年の墾田永年私財法は、従来は公地公民の方針を崩した施策としての評価が一般的だったが、私有を認めることで耕地を増やし、むしろ律令国家の土地支配を強化する役割を果たしたことを重視するようになっている。

### 政治と仏教の結びつき

平城遷都からしばらくの間は政治的に安定した時代が続いたが、737年、8年前の729年に左大臣長屋王を無実の罪に陥れた(長屋王の変)藤原四子(不比等の4人の子)が疫病の流行で相次いで亡くなると、聖武天皇は仏教への信仰を深め、仏教に政治のよりどころを求め

鎮護国家の思想によって国を守ろうと考えるようになった。

740年に都を恭仁京に移した翌年、国ごとに国分寺・国分尼寺を建立する方針を打ち出し（国分寺・国分尼寺建立の詔）、743年には紫香楽宮において大仏建立を開始する（大仏造立の詔）。745年に平城京に都を戻した後は、平城京東郊で大仏造立を開始し、752年に開眼供養を行うに至る。東大寺大仏である。平城京には飛鳥・藤原京から移された元興寺・大安寺・薬師寺（ただし、建物は平城京で新築）をはじめ、藤原氏の氏寺興福寺など多数の寺院が造営されており、政治と仏教の結びつきがさらに強められることになった。

こうした流れの中で、孝謙太上天皇の信任を得た僧道鏡は、藤原仲麻呂（恵美押勝）が反乱を起こして失脚すると、再び天皇になった孝謙太上天皇（称徳天皇）とともに法王として政治を行い、自ら天皇の位につこうとした。道鏡の即位は実現しなかったが、こうした仏教と政治の過度の結びつきが、のちに桓武天皇が平城京を離れる要因のひとつともなった。

## 天平文化

平城京には多くの大寺院が造営されていたが、聖武天皇が鎮護国家の思想を重視した政治を行い仏教をあつく保護するようになった結果、仏教中心の貴族文化が平城京を中心に栄えるようになった。これを天平文化と呼ぶ。

天平文化のもうひとつの特徴は豊かな国際性である。政治の手本とした唐の文化を基調としつつも、唐や新羅だけでなく、シルクロードの終着点とも言われるように、それらを通して伝わった遠く東ローマやペルシア、インドなどの様式を伝える多くの品々が、正倉院宝庫を中心に多数残されている。正倉院はもと東大寺の倉庫で、光明皇后が東大寺に納めた聖武天皇遺愛の品々や、大仏開眼の際に用いられた調度品などを伝えている。

この時代には『日本書紀』や『古事記』などの歴史書が完成し、『風土記』のような諸国の地誌の編纂も行われた。また、最古の和歌集である『万葉集』がまとめられる一方、貴族の教養として漢詩文の作成が重視され、『懐風藻』のような詩文集も編纂された。

律令国家の政務運営を支えたのは木簡である。役人たちは紙と木の特長をよく理解したうえで、目的に応じてそれを使い分けていた。編纂された歴史書には書かれない具体的な情報を伝えてくれる点で、木簡のような発掘調査で見つかる資料の果たす役割は重要である。